

はじめに

近頃、教師の間で、高学年の子どもの指導が難しくなったという話をよく耳にします。特に、どのように叱ればよいのか悩んでいる方は少なくないでしょう。

高学年にもなれば、口では大人にも負けません。身体も大きくなり、腕力で教師に引けを取らない子もいます。それに加えて、近年の世間一般の教師を批判する風潮が、子どもたちに、教師の存在を軽んじさせています。

教師の権威が失われつつあるからでしょうか。困ったことに、叱られることを認められない子が増えています。きまりを破ったり、周りの迷惑になる行いをしたりして教師に注意されても、叱られる事を良しとしない子が、近頃多くなりました。

「やっているのは、私だけじゃない」

「そんなきまりがあるのはおかしい」

などと、もっともらしい理屈で、叱られることから逃げようとします。ときには、あからさまに教師に反抗的な態度をとる子さえいます。

反対に、反省するそぶりを見せて、叱られることから逃れようとする子もいます。高学年にもなると、自分がどのような態度を見せれば、教師の気持ちを和らげ、早くその場から逃れることができるのか、その術を熟知しているからです。

いずれにしても、「自分が悪い」と分かっていても、自分を向上させるために素直に叱られることができないという、非常に困った子どもが増えているのです。

このような状況のもとで、教師の威厳を保つために必要以上に厳

しい姿勢で子どもを指導する教師がいます。反対に、子どもとの関係を悪くしたくないという思いから、「ほどほどの指導」で適当に幕を引く教師もいます。しかし、どちらの指導も、「叱る」という教育的行為とは言えないというのが、私の考え方です。子どもを成長させるために、私たち教師は、「叱る」という教育的行為についてしっかり考える必要があるのです。

「叱る」ことの目的は、子どもに反省させ、誤った行動や考え方を改めさせることです。つまり、子どもの自律心を育てることが目的です。恐怖を植え付けることでもなければ、子どもを教師の思うように動かすことでもありません。ましてや、子どもとの関係を気にして、遠慮しながら行う「叱り」など存在しません。

「叱り」の根本にあるのは、「子どもを思う気持ち」です。「誰のために叱るのか」「何のために叱るのか」を常に心に留めて、子どもに対することが大切なのです。

たとえ、経験不足で未熟であったとしても、子どもたちの鋭い感性は、あなたの気持ちを瞬時に察することでしょう。最初は反発もされ、適当なパフォーマンスを演じられたとしても、あなたの子どもを思う「本気」は、必ずや子どもたちの心に届き、教師として何ものにも代えがたい経験と想い出をプレゼントしてくれるはずです。

「目の前の子どもが好きだから叱る」

「子どもの成長の機会を大切にしたい」

そういう真摯な思いで、日々、子どもたちと格闘している先生方にとって、本書が少しでもお役に立てれば光栄です。

2014年2月

中嶋郁雄

C O N T E N T S

はじめに	3
Introduction——自律と自立を育てる叱り方を	11

I 章 高学年の叱り方指導 ここがポイント!

I-1 「叱り」を生かす信頼関係づくりのポイント	22
I-2 叱ったあのフォローをしっかり	28
I-3 高学年男子に顕著なタイプ別指導のポイント	32
I-4 高学年女子に顕著なタイプ別指導のポイント	36

Column 1 「叱りとは何か」に気付かせてくれた元教え子 40

II 章 [場面別] 困った高学年男子への指導のポイント

II-1 生活場面での困った高学年男子	42
①服装が乱れたり、 わざと乱したりしている子がいる	44
②時間にルーズで、 授業開始時刻を守れない子がいる	46
③何度も言っても 机やロッカーの整理ができない子がいる	48
④教師に反抗的、 暴力的な態度をとる子がいる	50

C O N T E N T S

⑤学校の物を乱暴に扱い、壊す子がいる	52
⑥ゲームや遊び道具、 マンガ雑誌などを持ってくる子がいる	54
⑦放課後のきまりを守らない子がいる	56
II－2 学級活動場面での困った高学年男子	58
①係活動や当番活動をさぼる子がいる	60
②給食を粗末にしたり、 好きな食べものを独占したりする子がいる	62
③クラスで育てているものや 飼っている生き物などを傷つける子がいる	64
④遠足や修学旅行などで 単独行動をしてしまう子がいる	66
⑤自分勝手にクラスのルールを 変えてしまう子がいる	68
⑥行事など自分の思い通りにならないと 協力しない子がいる	70
⑦クラスの和をわざと乱す子がいる	72
II－3 授業場面での困った高学年男子	74
①姿勢が悪く、落ち着いて座れない子がいる	76
②授業を抜け出して遊んでいる子がいる	78
③教師の指示を聞こうとしない子がいる	80
④わざとふざけたことを言って、 授業の妨害になる子がいる	82
⑤こっそりゲームをしたり、 マンガを読んだりする子がいる	84
⑥授業に関係のない おしゃべりをする子がいる	86

C O N T E N T S

⑦「塾でやった！」などと 授業内容を軽くみる子がいる	88
-------------------------------	----

II - 4 友達関係場面での困った高学年男子 90

①友達に激しく暴力をふるう子がいる	92
②威圧的に自分の要求を のませようとする子がいる	94
③友達の持ち物を取り上げたり、 いたずらしたりする子がいる	96
④運動や勉強ができない子を 激しくののしる子がいる	98
⑤「遊び」と言って、集団で 友達の嫌がることをする子がいる	100
⑥女子にやさしい友達をからかう子がいる	102
⑦自分が中心にならないと 気がすまない子がいる	104

Column 2 「叱りの心」を教えてくれた学校ーのワル 106

III 章 [場面別] 困った高学年女子への指導のポイント

III - 1 生活場面での困った高学年女子 108

①髪型や自分の容姿の状態を 何かと気にする子がいる	110
②化粧やアクセサリーなどをしてくる子がいる	112
③キャラクターグッズやキラペンなど、 不要な物を持ってくる子がいる	114

C O N T E N T S

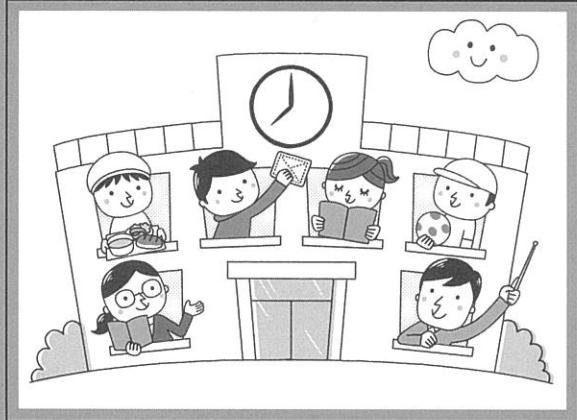
④男性教師を毛嫌いし、 男子との関わりをもとうとしない子がいる	116
⑤些細なことでも注意されると、 すねて口をきかなくなる子がいる	118
⑥おしゃべりをして、集団行動に遅れたり、 なかなか下校しない子がいる	120
⑦言い訳や嘘の多い子がいる	122
Ⅲ－2 学級活動場面での困った高学年女子	124
①うまく立ち回って、ラクをしようとする子がいる	126
②任せといった感じで、 話し合いに参加しない子がいる	128
③決まったことを、あとになって、 ぶつぶつ文句を言う子がいる	130
④同じ友達とばかり組んだり、 活動したりする子がいる	132
⑤行事やイベントに参加しようとしている子がいる	134
⑥「太りたくない……」などと言って、 給食を食べない子がいる	136
⑦ふき掃除や、手が汚れる仕事を 避ける子がいる	138
Ⅲ－3 授業場面での困った高学年女子	140
①手紙を回す子がいる	142
②指名されると、声が小さくなったり、 黙り込んだりする子がいる	144
③間違えると、すねてしまう子がいる	146
④ノートを写すことに熱中し、 話を聞いていない子がいる	148
⑤教科書やノートに、アイドルの写真や プリクラシールなどを貼っている子がいる	150

C O N T E N T S

⑥病気でもないのに、 体育の授業を度々休む子がいる	152
⑦答え合わせやテストで、 間違いをごまかす子がいる	154
III－4 友達関係場面での困った高学年女子	156
①グループで仲間外しをする子がいる	158
②友達の悪口を陰で言ったり、 落書きをしたりする子がいる	160
③気になる男子のこと、 友達とトラブルになる子がいる	162
④友達を独占しようとする子がいる	164
⑤友達と遊ぼうとせず、 保健室に入りびたる子がいる	166
⑥人の話に無理やり入り込んでくる子がいる	168
⑦交換ノートやメールで さかんにやりとりする子がいる	170
Column 3 教師を拒む女の子がくれた「教師のプライド」	172

Introduction

自律と自立を育てる 叱り方を





「叱り」は不易の教育方法

このところ、教育界はめまぐるしく変化しています。

偏差値重視の教育、知識詰め込み型の教育が批判され、意欲や関心を重んじながら子どもの自主性を伸ばすことを目的とした「ゆとり教育」が推し進められていたのは、ほんの数年前までのことでした。

ところが今、国際的な生徒の学習到達度調査（PISA）に象徴される学力低下への歯止めや、いじめや学級崩壊に代表されるような子どもたちのモラルの低下への懸念から、180度ともいえる方向転換がなされました。新学習指導要領によって、「基礎的・基本的な知識及び技能を確實に習得させること」「基本的な生活習慣、社会生活上のきまりを身に付け、善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないようにすること」などを方針とした取り組みが始まりました。

このような教育方針の転換は、今に始まったことではなく、戦後の教育界では繰り返し行われてきました。学校現場では、その時々に応じた教育方法が脚光を浴びては、消えていったのです。髪型や服装に流行があるように、教育界にも流行があるということです。ときに学校現場・教師は、その時々の流行に目を奪われてしまい、

教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

【教育基本法 第一条】

という大きな目的を忘れがちになります。

教育基本法で示されている通り、教育とは、豊かで平和な社会を築くために、その社会に貢献しながら自己実現することのできるような人格をもった人間を育てることです。他人の迷惑を顧みず、自分の幸せのためなら、周りが不幸になろうと関係ないといった人間を育てるような教育は、教育ではないと言って

も過言ではありません。

その時々の世相や風潮に応じた教育方法はあって当然です。しかし、人類が誕生してから延々と続いている教育の方法もあるはずです。「叱り」は、まさしくこの不易とも言える教育方法であり、社会的な動物である人類は、所属する集団に適応して生きるために、集団の和を乱す行為に対して、厳しく叱り、しつけながら、子どもを一人前の大人に育ててきました。それは、今でも変わりありません。

我が子や教え子が、他人の迷惑になる行いや、きまりを破る行いをすれば、私たちは必ず叱って教えます。子どもの言動に、カチンとくることがあれば、叱って教えます。子どもと生活をしていれば、一日のうちに必ず一度は叱る場面があります。

私たちが日々必ず行っている「叱り」という不易の教育的行為は、あまりにも当たり前で身近な行為であるがゆえに、誰もが専門家と言える反面、効果的に行われているかと問われれば、それはなかなか答えに窮する現状もあり、実際のところ、「叱ることは本当に難しい」と悩む人も多い教育方法です。



「叱る」ことの価値

「叱ることでは子どもは伸びない」といった、叱ることに否定的な考え方を聞くことがあります。

先にも書きましたが、人類は誕生した時から、大人は子どもを叱って育ててきたのだと思います。また、吉田松陰や福澤諭吉などの偉人も、幼い頃に叱られたエピソードを数多く残しています。おそらく、洋の東西を問わず、叱るという行為は、効果的に行われていれば、子どもの向上的変容を促すものであることは間違いないかもしれません。

叱ることを否定する人は、叱ることイコール子どもに精神的なショックをあたえ、さらには肉体的苦痛をあたえることだと考えているのだと思います。もちろん、苦痛によって子どもを向上させることはできないという考え方には、私も同感です。しかし、叱るという行為イコール子どもに苦痛をあたえること

「叱り」を生かす 信頼関係づくりのポイント

同じ言葉であっても、「言葉を発したのが誰か」によって、相手の心に響く場合と、そうではない場合があります。心に響く叱り方にするためには、子どもとの信頼関係を築くことが必要です。

子どもを教え導くために欠かせない要素があります。それは、指導する側の教師と、される側の子どもとの信頼関係です。

大人でもそうですが、「この人の言葉なら聞き入れよう」という気持ちになるのが人間です。尊敬できない人の言葉は、どんなに正論であっても、受け入れることができるのが普通です。特に、感受性が強く自己中心的な今時の子どもは、なおさらです。

ですから、私たち教師は、常に自身の生き方に磨きをかけ、子どもに信頼される人になる努力をしなくてはなりません。子どもとの関係を築くために大切なことは、「子どもを教え導く者として、手本となるべき人間を目指すこと」です。

教師というのは、常に子どもに見られていることを意識して、自分に恥じない行いや、子どもに胸を張って伝えることのできる生き方をしなくてはなりません。

決して聖人君子のような人間になる必要はありませんし、そんな人は世の中にめったには存在しません。しかし、自分の言葉に責任をもち、誠意をもって行動に移す……そう心がけることができる大人になる努力を続けることはできます。

子どもの感性は大人以上に鋭いものです。どんなに口では立派なことを言っても、行動が伴わない人は、すぐに見抜かれてしまいます。また、いくら体裁を取り繕ったとしても、その真の姿を子どもはたちまち感じ取ってしまうのです。人が見ていようがいまいが、自分の信念や言葉に対して誠実に責任をもつ姿勢が、大人には、特に子どもを教え導く教師には必要です。「この人は、信頼するに足る人だ」「この人のようになりたい」……そう思わせるような姿を見せるによって、子どもはその人を信頼します。どんなに厳しく叱っても、素直に反省し、受け入れる姿勢を見せるようになるのです。

信頼関係がある場合



信頼関係がない場合

